

【姫路市立東小学校】の取組

1 テーマ

前向きに伝え合い、新たな価値を創造する子を育てる

2 テーマ設定の理由

本校の児童は、誰とでも親しみやすく、素直な児童が多い。外国にルーツをもつ児童が1割程度おり、多様な文化・生活習慣・考えをもった児童が互いを受け入れ、共に生活している。学力面においては、国語科の「読む」や「書く」に課題があり、生活言語に不便がなくても、学習に必要な語彙量が少なく、より適切な言葉で表現することに課題がある。

そこで、大きく2つの取組を進めていった。
(①多様性を生かした考えを深める対話と②「日本語の目標」に即した教科のねらいに迫る指導「教科指導型日本語指導」)

3 研究経過

(1) 1年次(平成30年度)の取組

①副主題

多様な考えから一人一人の思考力を育てる授業づくり

②朝の語り合い

「朝の語り合い」を週1回、学年に応じたテーマに話し合い活動を取り入れることで、「話したい」、「聞きたい」という学級づくりを目指した。

授業を通して多様な意見に触れることで、「周りとは違っていい。」といった安心感や、新たな考えや視点に気づくことができた喜びや面白さを味わうことができた。

③思考を深めるために

金沢学院大学 多田孝志教授を招聘し、「対話を通じた深い学び」について研修を進めた。

児童から出された多様な考えを分類・整理するために短冊を用いて、思考の流れを可視

化できるようにした。さらに「省察・振り返り」をする時間を保障することで、児童が自分の考えを再構築できるよう、授業展開を工夫した。

(2) 2年次(令和元年度)の取組

①副主題

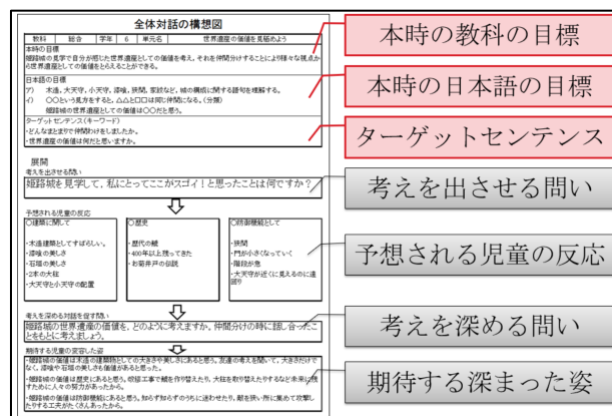
一人一人の思いや考えを大切にしながら学力の向上を図る授業づくり

②授業づくりの視点

学びの自覚化の3本の柱による授業を進め、授業づくりの視点を明確にし、どの授業でも一貫性がもてるようになった。

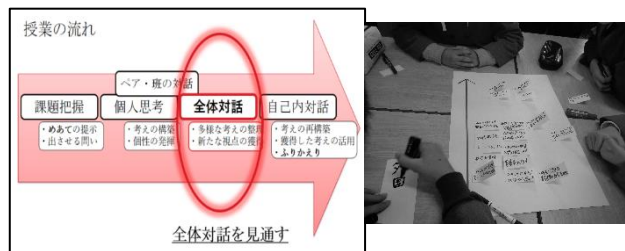
(ア)目標の焦点化

指導案と比べて、一時間の授業計画をスリム化した「全体対話の構想図」を作成した。本時のねらいに迫るための日本語の目標やターゲットセンテンスなどを盛り込んでいる。



(イ)多様性を生かした対話

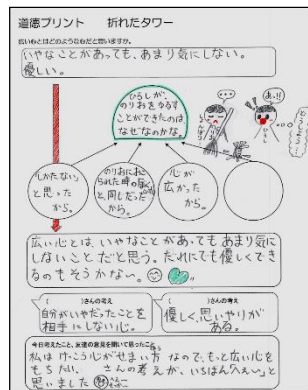
全体対話の場面では、出揃った思いや考えから、教師が何を問いかけ、児童に何を考えさせるのか十分に吟味する必要がある。「考えを深める対話を促す問い」を設定することで、焦点化された目標に到達できる思考に導く。



(ウ) 学びの自覚化

学びの自覚化のねらいは次の3点である。
「わかった・できた」の自覚を積み重ねることによる自尊心の高まり、学習内容の深い理解と定着、思考方法を獲得することによる自ら学び続ける姿勢の確立である。

道徳の「ふりかえり」活動では、授業前から考えがどのように変容したのか自覚することができるようにワークシートを工夫している。



(3) 3 年次（令和 2 年度）の取組

①副主題

一人一人の思いや考えを大切にしながら学力の向上を図る授業づくり

②言葉そのものを学ぶ国語科の授業づくり

ここ数年で初めて国語科の授業研究に挑戦した。大阪教育大学臼井智美准教授のご指導のもと、「ごんぎつね」の教材を使つての授業に臨んだ。

単元を通して、本文からごんの心情が分かる言葉（行動や会話文）を見つけ、そこから心情を読み取る学習展開を繰り返すことで、汎用的に児童が安心して授業に取り組むことができた。しかし、さらに読みを深める問いも考えておく必要があった。

「臼井先生の指導助言より」

- ・言葉と意味を教え込んでも、文脈を伴っていない言葉は覚えられない。単語を知っていても使う場面を知っているかが重要。そのためには、体験が伴うこと。
- ・怒りを言葉で表現する際、高いか低いかわる表現できるが、どんな質の怒りなのかは言えない。←「〇〇〇した時のような気持ち」と自分が体験した言葉（具体例）を使って説明させる。

③思考や対話の手立てとなる思考ツール、

I C T、ホワイトボードの活用

今年度、I C T環境が整ってきた。それに応じて、Google のアプリケーション活用の研修を進めた。また、各学年でホワイトボードを準備し一人一枚持たせている。発表する機会を全員に確保することは時間的に難しいが、書かせることで短時間にどの児童にも考えを持たせる機会ができています。思考ツールは今後も研修が必要だが、やはり可視化できることが有効で、さらに考えを分類・整理するなど次への学習を深める手立てとなっている。

4 3 年間の研究を終えて

(1) 成果

友達の意見を聞き、学び合う文化が育ってきた。対話を取り入れた授業を進めることで、他の教育活動に広がってきている。

また、教科指導型日本語指導の知見を取り入れることにより、的確なねらいをもって、授業の積み重ねができています。

(2) 課題

国語科に関しては、まだまだ授業研究の実践が足りない。算数科などと同様に、縦の系統性を意識した指導ができるよう領域ごとのカリキュラムを作成するなど、今後も研究を進め、児童に国語力をつけさせていきたい。

5 参考文献

- 1) 多田孝志 (2018) 「対話型授業の理論と実践－深い思考を生起させる 12 の要件」 教育出版
- 2) 多田孝志 (2011) 「授業で育てる対話力ーグローバル時代の『対話型授業』の創造」 教育出版
- 3) 臼井智美 (2014) 「学級担任のための外国人児童生徒サポートマニュアル」 明示図書
- 4) 黒上晴夫 (2013) 「考えるってこういうことか！『思考ツール』の授業」 小学館